

しんらん同人

光と闇

み仏のお救いが信ぜられたら、安心して明るい日々が送られるであろうのに、なかなか信ずることができない。どうすれば信ぜられるであろうか。どうすれば明るくなれるのであろうかと思ひ悩んでいる人は多い。



NO, 516

5月号

二〇一四年五月一日発行 郵便番号71-0052
発行所 東京都豊島区南長崎一-3の8 誓願寺
TEL 3955078288 FAX 3955068220
E-MAIL SEIGANJI@RESET.JP

何十年と聞いていながら道理解屈は

よくよく知っていて、信ぜられない。

こんな私を無宿善の機というのであろうか。死ぬまで信ぜられないのであろうか。

真つ暗な穴倉の中で、明るさを求めても、少しの光も見出されない。求めても求めても真つ暗な闇のなかである。

わが心は煩惱の塊であり、煩惱のために真つ暗がりなのである。この煩惱の闇を払い去ることは絶対にできないことである。

「いづれの行も及び難き身なればとても地獄は一定すみかぞかし」の祖聖の嘆きは、このことを言われたのではなからうか。いづれの行も及び

初転法輪の礼拝

Worship of the First Sermon

片岩、32.5 x 49.5cm、1-2世紀

ガンダーラ、パキスタン

東京国立博物館

3つの法輪を戴き、二童子が支える形の柱を台座の上に表し、そこに2頭の鹿が横たわる。この法輪柱の背後には円輪光が表され、向かって左に3人の比丘、右に二比丘と一礼拝者の姿があり、みな合掌作礼する。この浮彫は、釈迦が鹿野苑で最初に5大の比丘に説法したという初転法輪

(初説法)を表したもの

難い、どうしようもない身なのである。地獄こそ我が間違いない住家なのである。この闇を晴らすものは光よりない。千年の闇室も光が差し込めば、もうそこには一寸の闇もないのである。闇を晴らして光をいれるのではない。光が差し込めば、すでに闇ははれる。

「日いずれば刹那に十方の闇悉く晴れ、月出づれば法界の水同時に影を映すが如し。日は出でて闇の晴れぬことあるべからず。故に日は出でたるか出でざるをおもうべし。闇ははれざるか、はれたるかを疑うべからず。仏は正覚成りたまへるか、未だ成りたまはざるかを分別すべし、凡夫の往生得るべきか得べからざるか疑うべからず」

「衆生往生せずば仏に成らじ」と誓いたまひし法蔵比丘の十劫にすでに成仏したまえり。仏体よりはすでに成じたまひたりける往生をつたなく今日までしらずして空しく流転しけるなり」と。

仏はわれらを救わんがために阿弥陀仏となりたもうたのである。南無阿弥陀仏のみ名は、われらが往生すべき証拠なのであって、間違ひなくお救いにあづかることよと安心させていただくばかりである。

わが計らいを止めて、素直に本願のお呼び声を聞かせて頂きたいものである。



真宗念仏者の生活

如来の救済には条件はない。人間の善悪や、賢愚や、身分のよしあしを問題とせず、ただ如来の本願を信じ念仏申すばかりで救済にあずかるのである。

如来は迷える我を救わんがために、南無阿弥陀仏を成就してくださった。この廣大無辺の大慈悲に抱かれて安心を得たものが念仏者である。

光かぎりなく、いのちかぎりない浄土に生まれる身とさせていたただいたことは、道徳や修養は問題にはならない。しかし、念仏者は

如来の慈光に生かされた身であるから、自ら、その生活も正され、美しく莊嚴されてゆくのである。

眞実信心の念仏者は「しなければならぬ」という義務観ではなく「せずにはおれない」という報謝の行として生活が行われてゆくのである。

念仏者といつても一律ではない。そのいただく信は一つであつて、だれの信も変りはない、業はみんなちがうのであるから、報謝行のあらわれも各々ちがつた形であらわれる。だから念仏者はこうあるべきとはいえないが、おおよそのことを記してみたい。

念仏者は、南無阿弥陀仏の行者である。南無とは、すべてをおまかせして安心すること、阿弥陀とは無量、無限ということ、量り知れない光（智慧）といのち（慈悲）の仏に全托して安心する者が念仏者である。その念仏者は、無限の光に照らされ、無限の慈悲に抱かれる身である。

この光にあうからやがて安養のお浄土に参らせていただくという、

安心から生まれるものである。眞宗念仏者たること、何という幸せの身であろうか。

お浄土は古臭いのか

「後生の一大事」ということは嘗て、しばしば語られて来たものであるが、今日ではあまり問題にされなくなったように思われる。後生とは現世に対する後の世のことであり、われわれの死後の世界を指している。一大事とは二度とない唯一度の重大問題ということである。未来世に浄土に往生する最も重大な問題ということになる。

蓮如上人は「後生こそ一大事なり」とか、「誰の人もはやく後生の一大事を心にかけて」等と仰せられている。

浄土眞宗は往生浄土の教えであるから。浄土に往生することが重大な問題であることはいまでもない。ところが最近では、現実の救いということや、念仏生活の実践ということが強調され、はなはだしい

のは念仏を生活に生かす、などと叫ばれている。

極端にいうならば、未来浄土に生まれることなど、どうでもよいのであつて、現実の問題こそ重大であるというのである。

後生の一大事ではなく、現生の一大事と言いたいところなのであろう。「後生の一大事」を軽視し、「現生の一大事」を強調する多くの人たちは、唯物論的思想に迎合しているのではないか。

今日的偏向に従うことが、仏教の現代化なのであろうか。

うっかりすると、仏教徒が、仏教本来の意趣を破ろうとしている。

浄土に往生することが、古くさく現代人に相応しないから、そのことに触れないというのなら、浄土往生を説く浄土眞宗ではなくなるわけである。往生浄土を除いてしまふなら浄土眞宗は骨抜きになってしまう。仏教に顔をそむけている現代人に浄土眞宗が受け入れられるように、あらゆる手立てが必要なの

はいうまでもない。だからといって骨抜きになった仏教が（それはもう仏教ではない）いくら多くの人たちに受け入れられたとしても、意味もないことである。

人々に受け入れられるために仏法が説かれるのではなく、迷える人々を救い真実に眼を開かしめるものこそ仏法である。

「後生の一大事」が現代人からきらわれるから説かないというのなら、それはもう親鸞の遺弟ではない。真実の教法を宣布するために努めているのではなく、わが身を養うために努めていると考えられても仕方がない。仏（如来）は真実の法を説かれたのである。親鸞聖人はこの真実の法を聞かせられたのである。

真実の法は、如何なるもの力をもつてしても、また如何なるものによつても、曲げたり、変更されたりするものではない。

いつ、いかなる時代にも変わるものではなく、いつわりのない法であればこそ真実の法である。

如来の法が真実であるから、浄土もまた真実である。これを疑う

自分自身間違っている。

しかし、たしかに浄土が存在している、そこに必ず往来出来ること自ら信じてゆくのではない。如来の教法が、如来の誓願が真実であるから。浄土に生まれさせていただくと思ふるのである。

後生の一大事は一大事ともしられないものが解決するのではなく、如来の光によつて一大事と知らされ、如来の願力によつてこの一大事を解決していただくのである。



質疑応答

問 お金がかかるので死んでも法名（戒名）は付けたくないと思つていますがそれでよいでしょうか。

（注）戒律を大切にする宗派では戒名といいますが、浄土真宗は「そのままよいよ」の教えですので、戒名といわずに法名といえます。

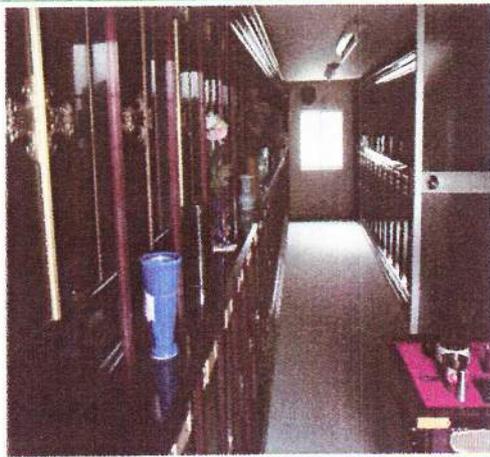
答 仏式の葬儀とは、生きている人が仏の弟子となる際の作法が応用されたものでした。つまり没後作僧といつて、人が亡くなった直後に故人を仏弟子にして、仏さまのもとへお送りする形式を踏んでいるのです。戒名という新しい名前を受けなければ弟子になれないのですから、戒名がなければ葬儀そのものが意味をなさない。

さらに申しますと、葬儀とは故人が俗世の悩み多き人間であることを卒業して仏の弟子に生まれ変わりを、仏さまの智慧と慈悲の中に永遠の命を受けけるように導かれるための儀式です。命日という言葉が示すとおり、人間は死

によつて無になるのではなく、現世の人間世界より、もっと上等な安らかな心の世界へ「住つて生まれる」のだと考えるのであります。

ところで、あなたは「お金がかかるから法名は付けたくない」つまり、法名を付けると高くつくと思つておられるようですが、その考え方には、やはり何か大事なものが抜けているのではないのでしょうか。法名の代価としてご住職個人にお金を払うのだと考えておられるのでしたらそれは間違いなのです。

誓願寺納骨堂



釈 尚文 独り言

四月八日はお釈迦様お誕生の日「降誕会」でした。今年は大泉誓願寺から「花まつり」の用具一式を借りてきて準備をし、当日は玄関横の駐車場皆様と甘茶をかけました。また四月十三日の定例法座日には本堂内でもお参りの方と甘茶かけをしました。

除夜の鐘をついたり久し振りの花まつり等、開催に自信が無く、事前のご案内も十分ではありませんでしたが、今後はそれなりのご案内をいたしたいと考えます。秋のお彼岸にはバザーを実施したいと考えていますが・・・その節にはご協力をお願い致します。

ちなみにお釈迦様に関する日には、十二月八日「成道会」お悟りの日。二月十五日「涅槃会」ご命日があります。

五月御法座案内

十一日(日) 午前十時 聖典講座

正午 健康相談

講師 佐藤公彦医師

十八日(日) 午前十時 なかよしくらぶ

二十五日(日) 午前十時 永代経法要

講師 高田慈昭師

さて、私にとって今年の春の訪れは、いつもと異なりあわただしいものでした。本山での教師教修受講の準備に加え、春暖の差が激しく桜の開花が急に訪れ、その後の強雨・強風で見ごろもわからないまま花吹雪となり季節が終わり、お約束してしまいましたお花見もままならない状態で心残りの一語です。来年こそお花見を行いたいものです。



編集後記

◎毎月「しんらん同人」を制作するのが、身体的につらく七月から大恩寺と共同で作る予定。八十歳の年寄りにはちよつと無理な感じがする。

◎五十年以上、同人を作り非常に勉強になった。「仏法は身を持って味わっていく事が一番大切なこと」を教えられたが、実際に布教に回ると、ある程度の理屈も必要であった。

◎これからの仏教伝道はどうあるべきか?非常に難しい。こんなによばらしい念仏の教えが、消えて無くなるはずはないし、どういう形になるのだろうか。

◎お寺には余りお参りしない、パンフレットを作つても読まない
◎ゴルフやテニス・ハイキング等好きな事は時間を作つてやるが、大事な自分の後生の一大事にはあまり積極的ではない気がする残念である。

◎年を取ると何をやるにしても億劫になる。家で寝ていたほう

が楽で段々閉じこもつてしまう。

◎お寺が年寄りの集まる良い場所だと思ふが、何か宗教を強制されるのではないかと思つている。自由に語り合い楽しい場所だとは知らない。

◎花祭りで花御堂を駐車場にだしてみたが一日五、六十人が花御堂をのぞいていた。

◎リキとナナは、相変わらず元気で仲が良い。いつもくついで遊んでいる。こちらがうらやましく感じる。リキがやさしいからだろうか。

